

社会福祉分野の構想について

On the Designs of the Fields of Social Welfare

松 田 眞 一

Shinichi MATSUDA

目 次

- 1 はじめに
- 2 社会福祉分野の構想の類型および論点
 - (1) 社会福祉分野の構想の類型
 - (2) 社会福祉分野の構想の論点
- 3 社会福祉分野の構想の論点の検討
 - (1) 論点1タイプ
 - (2) 論点2タイプ
- 4 おわりに

1 はじめに

社会福祉分野をどう構想するか¹⁾。社会福祉分野の構想は、現在いくつもみられる。小稿では、それらを大きく4つに類型化し(後述, 2—(1)参照), その類型間の関係から本テーマの論点を抽出し, 検討する。

この作業は, 社会福祉分野論に属する。しかし, われわれは, それを, 単にそれだけの問題としてとらえない方がよいと考える。何故なら, このテーマは, みかたをかえれば, 社会福祉とは何かという基本問題を考える上での具体的な糸口としてもあるから。したがって, この関係を逆にいえば次のようになる。すなわち, 社会福祉とは何かに対する一定の判断をもつことなしには, その社会福祉分野論は, 十分なる展開を期しえないのではないかと。小稿では, この社会福祉とは何かを視点に, テーマに接近する。

以上から, 行論は次のようになる。まず, 現下の社会福祉分野構想を類型化し(2—(1)), それをとおして, このテーマは何を論点としてもつかを探る(2—(2))。この論点を, 代表的な社会福祉分野構想の議論を素材に検討する。そのさい, 論点の検討を上視点からおこなう(3—(1), (2))。以上をとおして, 本テーマに内在する問題の所在と課題を明らかにする。あわせて, 上述視点が, 本テーマに対し有効な1視点としての位置から基本的視点の位置に移行することを確認する。

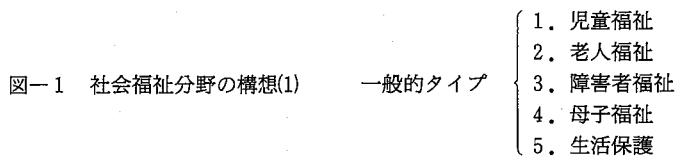
2 社会福祉分野の構想の類型および論点

- (1) 社会福祉分野の構想の類型

社会福祉の分野は、その分け方の基準をどうとるか、でいかようにも分けることができる。したがって、現下の分野構想を類型化せんとすれば、まず、この基準に注目し、とりわけ何を主要な基準としているかを軸に類型化をおこなうことが必要となる。

1) 一般的タイプ

社会福祉分野の構想で一般的にみられるタイプは、分野のわけ方の基準として「社会福祉のサービスの利用者の性質のちがい²⁾」をあげるものである。これは、社会福祉の分野を、「対象者の特徴を基準³⁾」に構想するタイプともいえる。今、この基準に基く構想の基本型は、次のように社会福祉分野を構想するものである。

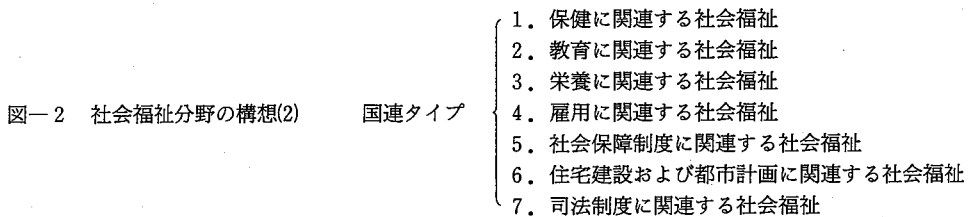


今、障害者福祉を、身体障害者福祉と精神薄弱者福祉に分解すれば、全体として6分野になるから、この構想は、通常、福祉6法の分類に等しい。

なお、一般的タイプは、これのみからなるというのではなく、「対象者の特性」を中心としつつ、それを、次のような基準——社会福祉サービスの提供される場所⁴⁾、社会福祉の主体の性質⁵⁾、社会福祉の方法⁶⁾等を付加して、再編成ないし細分化する場合も含む。

2) 国連タイプ

社会福祉分野の2つめの構想は、国連の分野論⁷⁾、すなわち「基本的社会制度に関連する社会福祉」のタイプである。これは、基本的社会制度（それを具現化したものとしての一般施策という呼称も可⁸⁾）を基準にとり、それに社会福祉を関連づけ、位置づけるというしかたで、社会福祉分野を構想するものである。そのさい、基本的社会制度というものはタテワリで存在するところから、社会福祉の分野も、そのタテワリの数だけ存在することになる。具体的には次のようになる。



3) 『事典』タイプ

『現代社会福祉事典⁹⁾』（以下『事典』とする。）は、日本社会福祉学会を代表するメンバー（複数）の編になるもので、各種辞典の中でも一定の評価を確立しているものである。そこでは、社会福祉分野を図一3のように構想している。

図一 3 社会福祉分野の構想(3)

『事典』タイプ

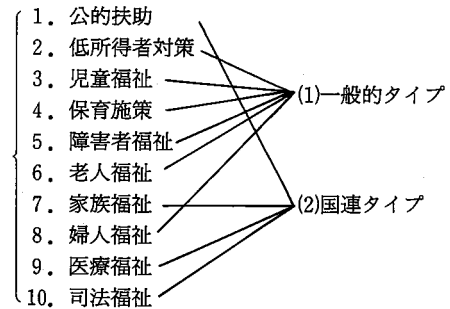
1. 公的扶助
2. 低所得者対策
3. 児童福祉
4. 保育施策
5. 障害者福祉
6. 老人福祉
7. 家族福祉
8. 婦人福祉
9. 医療福祉
10. 司法福祉

ところで、今、上の10分野について、それがいかなる基準に基いているかの議論はみられない。したがって、以上は、一見すると、単なる羅列にみえる。しかし、それらは、上にみてきた2つのタイプ(1), (2)のどちらかに収斂するものとしてある。したがって、10分野はそれぞれ、(1)対象者の特性（いわゆる社会的弱者）を基準とするものと、(2)基本的社会制度を基準とするものとに分解する。

したがって、上の10分野は、次のように再編可能となる。

図一 4 社会福祉分野の構想(3)

『事典』タイプ



上のように修正したものを、以下、社会福祉分野構想(3)『事典』タイプとする。

4) 岡村タイプ

第4のタイプは岡村重夫のタイプである¹⁰⁾。岡村は、下図(図一5)のように、社会福祉分野を、大きくA, B 2部門から構想する。Aは「基本的社会制度に関連する社会福祉¹¹⁾」の分野であり、Bは「個人の社会関係の保護に関連する社会福祉¹²⁾」の分野である。A, Bそれぞれの内容は図のとおりである。

図一 5 社会福祉分野の構想(4)

岡村タイプ

A 基本的社会制度に関連する社会福祉

B 個人の社会関係の保護に関連する社会福祉

1. 経済的安定・保障制度(社会保障制度)に関連する社会福祉
2. 職業の安定・促進制度に関連する社会福祉
3. 医療・保健制度に関連する社会福祉
4. 教育制度に関連する社会福祉
5. 家族関係の安定に関する社会福祉
6. 社会的協同・参加の保障・促進制度に関する社会福祉
7. 文化・娯楽の保障・促進制度に関連する社会福祉

1. 児童福祉
2. 老人福祉
3. 母子福祉
4. 心身障害者福祉
5. その他の総合的福祉サービス(general practice)

尚、岡村タイプは、構成上、Aは(2)国連タイプに、Bは(1)一般的タイプに等しいので、(1)+(2)からなる『事典』タイプに等しいようにみえるが同じではない。それを岡村的に修正している（これについては後述¹³⁾、3-(1)参照）。

(2) 社会福祉分野の構想の論点

上において、現下の社会福祉分野の構想を、4つに整理してみた。

今、4類型の間には、あるパターンがみられるように思う。それは、分野の構想が、①まず、大きく2つ——(1)一般的タイプと(2)国連タイプ——にわかれること、②次に、この(1)と(2)の合成のしかたで、さらに2つ——(3)「事典」タイプと(4)岡村タイプ——にわかれることである。

学会の動向は、(3)「事典」タイプを意味したから、社会福祉分野の構想は、②の方向が支配的であり、したがって、この方向にたつ時に、社会福祉分野構想の論点のみえてくる。それは、異なる2つのタイプ——(1)と(2)——を、内的にいかに関連づけて1つの分野とするかというものである。ところで今、②の方向には、(3)の他に(4)岡村タイプも存在していたから、(1)と(2)の関連づけにも2つ、すなわち、(1)+(2)の「事典」タイプと、 $A(=2)+B(=1)$ の岡村タイプがあるということになる。ここから、分野構想の論点は、(1)、(2)どちらをベースに他を関連づけるかで2つの様態があり、いわば、論点にも2つのタイプが存在する、ということになる。

今、(2)をベースに(1)を関連づけるケース¹⁴⁾を論点1のタイプ、逆に(1)をベースに(2)を関連づけるケースを論点2のタイプとすれば、岡村タイプ($A+B$)は、(2)($=A$)をベースに(1)($=B$)を関連づけんとするから、その構想は論点1タイプのものであったことになる。それに対して、『事典』タイプ((1)+(2))は、(1)をベースに(2)を関連づけんとするから、その構想は論点2タイプのものであったことになる。

この論点タイプの違いは、論点に迫る視点の議論も可能にさせる。すなわち上において、現下の構想タイプは論点の違いとしてあったのだが、その論点タイプの違いは、実は、社会福祉というものを(1)、(2)どちらでイメージするか、の違いとしてあるのではないかと。ここに「はじめに」でふれた接近視点（社会福祉とは何かへの注目）が、論点を照射するさいの次元が明らかとなる。

以下では、論点——(1)、(2)の関連・総合——の2つのタイプについて、それぞれを代表する議論をとりあげ、検討に入る。そのさい、上述視点から、(1)、(2)それぞれを重点とする他との関連・総合が、どのような社会福祉イメージ・規定によって、どのようにおこなわれているか、に注目する。

3 社会福祉分野の構想の論点の検討

(1) 論点1タイプ

筆者の知るかぎり、岡村重夫は、社会福祉の分野を構想するにあたって、何が論点か、を明確に意識している唯一の人である¹⁵⁾。ただしその論点は、われわれの上述整理からいえば、論点1のタイプにあたるが。現在、論点1をもつ構想は岡村にしかみられない。ゆえに、氏の議論を素材に論点1を検討する。

1) 論点の展開

氏の構想は、形の上では、(2)国連タイプをベースに、(1)一般的タイプを関連づけようとしたものに等しい。したがって、氏の分野は、形式的に(2) \supset (1)という構造になる。しかし、内容的には、氏の独自の社会福祉規定によって、(2)はAに、(1)はBに翻訳され、 $A\supset B$ になる。ゆえに、この $A\supset B$ の関連・総合を検討するには、まず、氏の社会福祉規定からはじめなければならない。

氏も、(2)国連タイプ同様、「基本的社会制度に関連する社会福祉」を重視する。そこから氏は、社会福祉を、基本的社会制度を補充¹⁶⁾するもの、ととらえる。一般に、社会福祉の補充性とは、社会福祉が、外的に、基本的社会制度との間でどういう関係にあるかというその特徴を示したものであるが、岡村はそこにとどまらず、さらに、その時、社会福祉は、内的に、どういう特徴を示すか¹⁷⁾、というところまでとらえんとする。したがって、氏の社会福祉規定には、外的・内的両側面があり¹⁸⁾、そこから、それらを一体化して、社会福祉は、一定の内的特徴ゆえに、基本的社会制度との間で補充性という一定の外的特徴を示すのだ、ととらえられる。

今、岡村の社会福祉規定の2側面を図式化すると次のようになる。

図-6 岡村の社会福祉規定の2側面

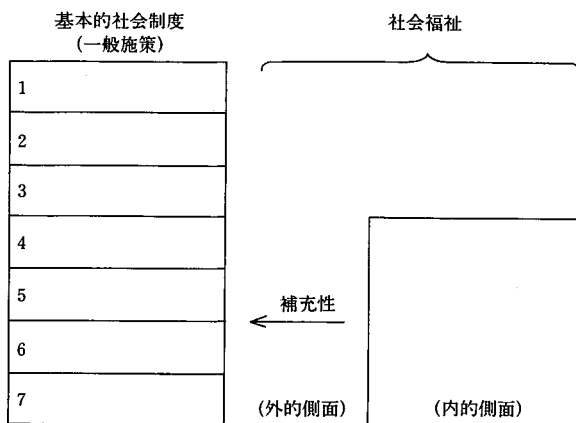
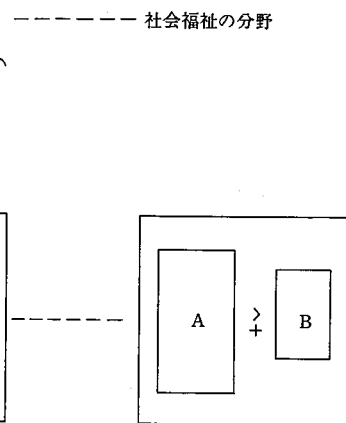


図-7 岡村の社会福祉分野



岡村の分野構想は、この図の空白部分すなわち社会福祉の内部を、どのように構想するか、というものとしてあり、それが、図-7のA > Bであった（図-5は、それを具体的に表現したものであった）。

したがって、A、Bおよびその関連づけがどうなっているかを確かむには、外的規定にとどまることなく内的規定にすすむことが必要になる。岡村によれば、社会福祉の内的規定は、「社会関係の主体的側面において、個人がもつすべての社会関係を調整・統合する援助活動である¹⁹⁾」とされる。

ここから、社会福祉分野のA部門すなわち「基本的社会制度に関連する社会福祉」と、国連の「基本的社会制度に関連する社会福祉」との異同が明らかになる。すなわち、国連のいう社会福祉は、基本的社会制度（7つ）を個別化する援助活動（social work）を意味するのに対し、岡村のは、各制度ごとに、個人に（社会関係の主体的側面において）、他の諸制度を調整・統合して個別化する援助活動を意味する。より具体的にいえば、社会福祉とは、個人が、特定制度の利用によってニーズの充足をはかろうとするさい、同時に、そこにおいて残る他のすべて（6つ）の制度を「調整・統合²⁰⁾」する援助活動を意味する、と。

以上から、岡村の社会福祉=A部門は、その基本的社会制度との関係を、図-8のように具体化しうる。それが、岡村の社会福祉分野の本体=A部門の基本型である。

次に、この基本型を、A部門内の個々の基本的社会制度に挿入すると、A=「基本的社会制度に関連する社会福祉」は図-9のように具体化される。

すなわち、Aとは、各制度ごとに、個人の基本的社会制度の調整・統合をはかるし方で基本的社会制度を補充せんとする分野を意味する。これが、岡村の社会福祉分野の本体部分=Aの内実であ

図-8 岡村の社会福祉の基本型

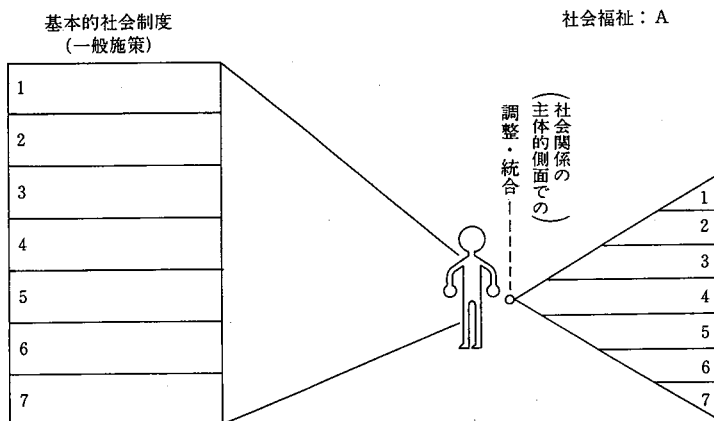
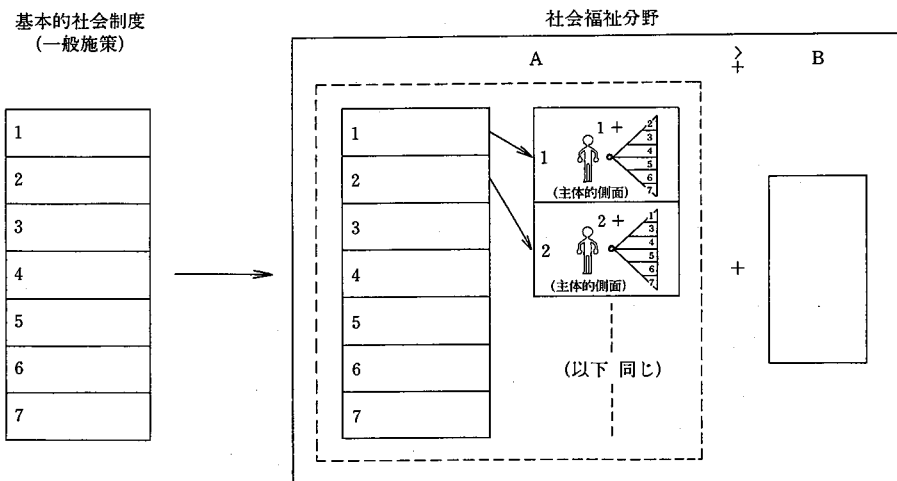


図-9 岡村の社会福祉分野Aの拡大図式



る。

では、このAとBとの関係はどうか。

岡村において、Bとは「個人の社会関係の保護に関連する社会福祉」であった。このBがAに加えて必要とされる理由をみると、岡村は、Aだけでは、人間のニーズ充足が保障されない場合があるからという。具体的には、Aによっても、尚かつニーズ充足に難が残る人・層がいるからとされ、具体的には、児童、老人、障害者、母子等²¹⁾がそうである、と。とすると、ここに成立する分野は、「対象者の特性」を基準とする(1)一般的タイプに等しい。こうして岡村は、「個人や集団の特性（ハンディキャップをもたらす条件²²⁾」に基くB部門をつけ加える。

岡村は、以上から、次のように結論する。「筆者の提案した現代の社会福祉のあるべき分野は、A、

B両部門を合わせたものである²³⁾」と。

2) コメント

上において、岡村の社会福祉分野構想をとりあげ、論点1すなわちA \supset Bの関連・総合をみた。明らかになったことは何か。

岡村はまず、社会福祉を、外的に、基本的社会制度を補充するものとして規定することから出発し、そこから内的規定にすすんで、社会福祉分野の本体をAととらえた。その意味で、Aは確かに、Aの内実をもって基本的社会制度を補充していた。しかし、Aのみによる補充では十分ではなく、Bが追加された。

ということはどういうことか。岡村の社会福祉の内的規定は、論理的に、Aと対応していたが、そのAはさらにBによって補充されることによって、はじめて基本的社会制度に対して社会福祉の補充性が完結する、という話になっている。しかし、みたように、氏の内的規定すなわち社会福祉イメージは独特であり、本来、社会的ハンディキャップ層（以下、ハンディ層）への生活サービスを含むものとしては規定されていない。つまり、岡村においては、社会福祉・A部門は、現実には、B部門なしには補充性を完結しえないものとしてあるにもかかわらず、その社会福祉規定は、本来、B（対象者の特性による分野）を対象としないものとしてある。これについては論史的に次のことを補足しておく。すなわち岡村の内的規定は、社会福祉の固有性を表現したものとされ、その意味では本質規定にあたるものののだが、今、重要なことは、それが、一般に社会福祉をハンディ層への生活サービスとする社会福祉規定を否定した上で提起されていることである²⁴⁾。

ゆえに、岡村は、社会福祉の分野論を「A、B両部門を合わせたもの」が「現代の社会福祉のあるべき分野」である、と構想したが、そのときBの関連づけにはある不分明さが残る結果になっている。

(2) 論点2タイプ

その論点意識は、岡村重夫ほど明確ではないが、仲村優一も、社会福祉分野構想の論点を把握しているように思われる²⁵⁾。ただし、その論点は、われわれの整理からいえば、論点2のタイプにあたるが。

1) 論点の展開

仲村の議論は、岡村とは逆に、基本的に、(1)一般的タイプをベースに、(2)国連タイプを関連づけたものとしたものである²⁶⁾。

氏の社会福祉規定も、岡村同様、「基本的社会制度(既述のようにこれの具体化したものを一般施策といい、仲村はこの呼称を使う。)の補充性²⁷⁾」である。そして、氏もまた、その補充性を、単に、社会福祉が外的に、一般施策に対してもつ特徴だけにとどめずに、その時、内的に、どういう特徴をもつか、というところまでとらえんとする。つまり、氏の社会福祉規定も外的・内的両側面からなり、それらを一体化して、社会福祉は、一定の内的特徴ゆえに一般施策との間で補充性という外的特徴を示すのだ、ととらえられる。

したがって、仲村の社会福祉規定を図式化(図-10)すると、岡村の図式と同じ形になる。

仲村の分野構想は、この図式の空白部分すなわち社会福祉の内部をどのように構想するか、というものとしてあり、それが図-11の(1) \supset (2)であった(それを具体的に表現したものが図-4であった)。したがって、(1)、(2)およびその関係がどうなっているかを確かむには、仲村の社会福祉の内的規定にすまなければならない。

図-10 仲村の社会福祉規定の2側面

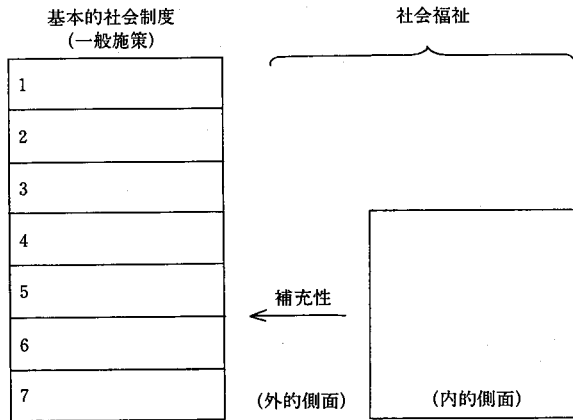
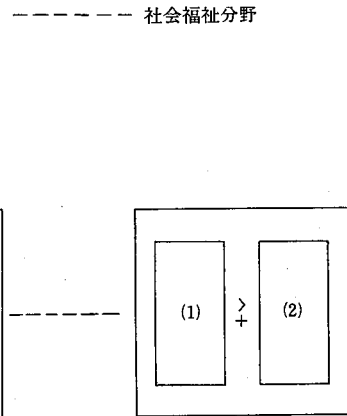


図-11 仲村の社会福祉の分野



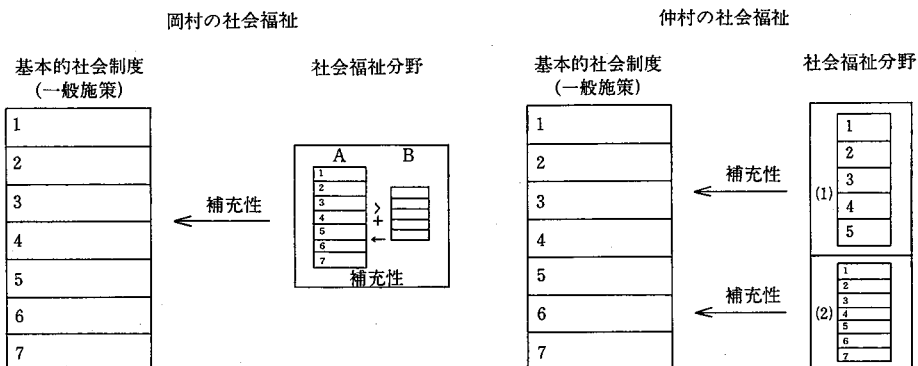
氏によれば、社会福祉は、ハンディ層を対象とする援助活動であるとされる²⁷⁾。つまり、氏の社会福祉は、ハンディ層を対象とするという内的特徴ゆえに一般施策を補充するという外的特徴を示す形となる。ここから、仲村の分野論は、岡村と異なり、(1)タイプ(ハンディ層を対象とする分野)が本体部分となる。

しかし、仲村のこの本体部分は、単にハンディ層5分野からなるというだけのレベルにとどまり、それ以上にはすすまない。何故なら、氏の社会福祉の内的規定はそのレベルにとどまっており、それ以上に内的ではないからである。当然、(1)の内部は、岡村のようには図式化しえない。

では、この(1)と(2)との関係はどうか。

仲村の(2)とは、国連の「基本的社会制度に関連する社会福祉」であった。そしてそれは、みたように、基本的社会制度(仲村のことばでは一般施策)を、個人に個別化する援助活動(social work)としてあったから、その意味において、(2)は一般施策を補充するものとしてある。ところで、それとは中身はちがうものの、(1)(ハンディ層を対象)も一般施策を補充するものとしてあった。ゆえ

図-12 社会福祉分野の比較—岡村と仲村—



に、(1)と(2)は、共に、一般施策を補充する点で等しい。しかし、(1)と(2)の関係は、岡村のAとBのように2つの間で補充性を示す関係にはない。仲村の2つの部門は、図-12のように、一般施策に対してタテに並び、内的関連をもたぬものとしてある。

以上から、仲村の社会福祉分野の(1)、(2)は、岡村の「A、Bの合わせ方」とは異なった「合わせ方」となっている。

2) コメント

上において、仲村の社会福祉分野構想(『事典』タイプ)をとりあげ、論点2すなわち(1)と(2)の関連・総合を検討した。明らかになったことは何か。

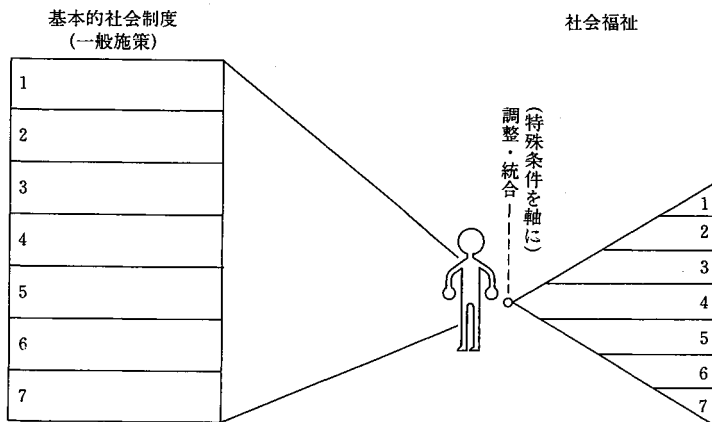
仲村は、まず、社会福祉を、一般施策を補充するものとして規定することから出発し、それを、分野論として(1)ととらえた。しかし、仲村の(1)は、単に対象特性(弱者)による分野が示されたにとどまり、たとえば、岡村のようにそれ以上の内部構造が明らかになったわけではない。つまり仲村においては、分野(1)を導いた社会福祉の内的規定に不徹底さという問題がみられる。

では、仲村の内的規定は、どうすればより内的になるだろうか。それには、仲村の補充性すなわち「社会福祉は一般施策の手の及ばぬところを補充する」という意味を、次のように逆にとらえてみるとよいだろう²⁸⁾。すなわち、「一般施策の手の及ばぬところが、社会福祉によってどのように担われているか²⁹⁾」と。このように問うとき、補充性による社会福祉の説明は、「社会福祉の内部はどうなっているか³⁰⁾」という話になるから、その分だけ社会福祉の内的な説明に向かうことになる。

まず、一般施策³¹⁾は、国民の生活の各領域(7つ)で、ニーズに平均的・一般的に対応するという特徴をもっている。これを今、ニーズが属する生活の各領域の方に注目してつかみなおすと、一般施策というのは、総体として、国民の「生活全体への対応策・サービス」である、という特徴になる。

このようにみえてくると、社会福祉が、「一般施策の足りないところを補充する」という意味は、次のように深められる。すなわち、一般施策(国民の生活全体策・サービス)の及ばぬところを担う社会福祉の内部は、「特殊条件(ハンディキャップの条件)をもつ人々の生活全体策・サービス³²⁾」からなる、と。つまり、社会福祉というのは、一般施策がもっている全国民向けの平均サービス(生活全体策・サービス)を、国民の中の特殊ニーズをもつ人々に、その特殊条件に即して届けたもの

図-13 仲村の社会福祉の基本型

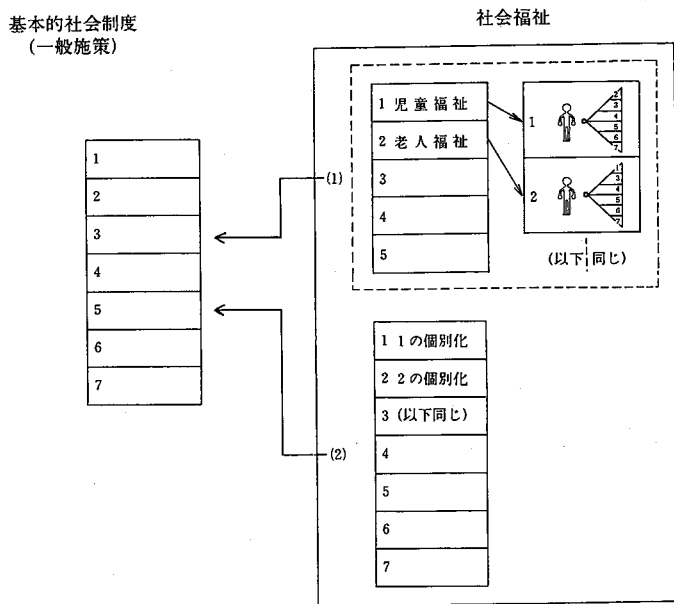


(生活全体策・サービス)のことを意味しよう。

したがって、社会福祉の内的規定は、「特殊条件に即して編成・総合された生活全体策・サービスである³³⁾」ということになる。このように、社会福祉の内的規定を明確化することによって、はじめて社会福祉分野の(1)の内部を図式化する(図-13)。

これが、仲村の社会福祉分野の本体=(1)の基本型をなす。この基本型を(1)の個々のハンディ層対策に挿入すると、(1)の内部は次のように具体化される(図-14)。

図-14 仲村の社会福祉分野(1)の拡大図式



しかし、仲村の(1)を、上図のように具体化したとしても、(1)と(2)の関係は明らかにはならない。何故なら、2つは、それぞれが独自に、一般施策との間で補充性を示していたからである。すなわち仲村の社会福祉の内的規定には、この意味での補充性の不徹底さという問題も内在しており、そのため(1)、(2)2つの分野が串刺しにされる状態にはなっていないのである。

こうして、仲村の分野論 ((1)と(2)) も、その社会福祉規定ゆえに、(1)、(2)の関係づけに不分明さが残る結果になっている。

4 おわりに

社会福祉分野をどう構想するかの論点——(1)と(2)の関連・総合——を、2つの論点タイプについて、それぞれの代表的な構想議論を素材に検討した。

以上から、本テーマに内在する問題は何か。それは、現下の社会福祉分野構想は統一したイメージをもちえていないということであり、それを具体的にいえば、社会福祉分野の内部構造のつかみ方で、(1)、(2)という要素は同じながら、肝心の軸にあたる要素で対照性がみられる、ということである。ここから、われわれは、社会福祉分野の構想として、一体どちらのタイプが妥当か、という論点に直面する。同時に、社会福祉分野論がもつべき視点の自覚をうながされる。これらのことに

ついて、次の点を確認しておく。

① 社会福祉分野の構想として、どちらのタイプが妥当かを判断するには、それぞれの社会福祉規定を比較検討する作業が必要になる。

② しかし、その規定の違いおよび対照性から、その作業は、社会福祉とは何かについての原理的検討それ自体を要請する。

③ つまり、分野論は、社会福祉とは何かの原理的検討がすすんだ度合に応じて分野の構造も明らかになる、という関係にある。

④ したがって、分野論において、社会福祉とは何かという接近視点は、単に有効な視点の1つとしての位置から不可欠の基本的視点としての位置にすえられねばならないものとしてある。

⑤ 視点の位置の確認とともに、社会福祉分野論は、早急に①、②に着手することを課題として求められている。

注

- 1) 社会福祉論・学で、社会福祉分野あるいは社会福祉の分野ということばが使われるとき、それは、社会福祉がいかなる分野＝部門からなるか、という意味で使われる。したがって、社会福祉分野論といった場合には、社会福祉がいかなる分野＝部門からなるかと考えるかが中心の議論となる。小稿は、その考え＝諸構想を検討するものである。
- 2) 仲村優一『社会福祉概論（改訂版）』誠信書房、1991年、65ページ。
- 3) 岡村重夫『社会福祉原論』全国社会福祉協議会、1983年、129ページ。
- 4) 福祉サービスの提供される場所による分け方としては、施設福祉、在宅福祉、地域福祉等がある。仲村、前掲書、67ページ。
- 5) 社会福祉の主体の性質による分け方としては、公的分野と私的分野に分ける例がそれにあたる。仲村、前掲書、65ページ。
- 6) 社会福祉の方法による分け方としては、「ケースワークやグループワークのような社会福祉固有の方法が直接的に利用される分野と、医療教育・司法などの領域でそれらの第一次的目的を達成するのに役立つように社会福祉の方法が用いられる分野に分けて、それぞれを第一次的分野・第二次的分野と呼ぶ分け方が使われる」。仲村、前掲書、67ページ。
- 7) これは、国際連合の社会問題部 (Dept. of Social Affairs) の調査報告書にみられる (1950年)。岡村重夫、前掲書、130ページ。
- 8) 一般施策は、基本的社会制度が現実的、具体的に表現された制度・施策を意味する。詳しくは、後述「(2) 論点タイプ2」―「2) コメント」を参照。
- 9) これは、仲村優一、岡村重夫、阿部志郎、三浦文夫、柴田善守、嶋田啓一郎を編集委員として編まれ、1982年に全国社会福祉協議会から刊行された。
- 10) 岡村重夫、前掲書 (注6) においてみられる。
- 11) 同上書、132ページ。
- 12) 同上、133ページ。
- 13) 「3 社会福祉分野の構想の論点の検討」―「(1) 論点1タイプ」―「1) 論点の展開」を参照。
- 14) 論理的には、(1)をベースに(2)に関連づける論点2タイプの方を、論点1タイプと呼称すべきなのだが、以下では、論点意識の明確な岡村から論述を始めることにしたため、この(2)をベースに(1)に関連づける岡村の方を論点1タイプとした。
- 15) 岡村重夫、前掲書、「第5章 社会福祉の機能と分野」の「3節 社会福祉の分野」(127～135ページ)を参照のこと。
- 16) 「……この補充性ということばは、社会福祉以外の社会制度に対して、社会福祉が附属的ないし追加的な社会制度であるということである」(岡村重夫『社会福祉学(総編)』柴田書店、1968年、138ページ)。
「つまり、社会福祉以外の社会制度が、本質的にとりあげるこゝのない固有の対象ないし問題と機能を社会福祉制度がもつことによって、一般的社会制度を補充するというのがこの固有性の意義である」(傍点引用者。岡村は、同上、138ページ)。

- 17) すぐ後にもふれるが、ここで明らかにしておく、それは、「社会関係の主体的側面において、個人がもつすべての社会関係を調整・統合する援助活動」といえる（引用者によるまとめ）。
- 18) 社会福祉の2側面を外的・内的としてとらえ、そこから、その一体化したものとして社会福祉を規定する視点はわれわれのオリジナルである。

この視点から、戦後社会福祉理論の整理を試みてきた（次の①②）が、小稿はこれらの上に可能となっている。

① 「戦後社会福祉理論整理のための1視点と若干の作業」『高知女子大学紀要（人文・社会科学編）』第39巻，1991年。

② 「社会福祉とは何か」河合幸尾・宮田和明編『社会福祉と主体形成』法律文化社，1991年。

- 19) この岡村の社会福祉規定がどのようなものか、かつ、どのようにして導かれるか、について補足しておこう。岡村によれば、社会福祉でいう生活とは、人間が「基本的社会制度」（7種類ある。以下、社会制度とする。）を利用して、「基本的要求」（7種類ある。以下、ニードとする。）を充足することを意味する。岡村はこの人間と社会制度との関係を「社会関係」と規定するから、生活とは、ひとまず「社会関係」の全体（7つの合計）といえる。

今、この「社会関係」は、そのつかみ方から分析的に2側面（「客体的側面」と「主体的側面」）でとらえられる。まず、人間はニードをみたすためには社会制度を利用しなければならない。しかしそのとき、社会制度から人間に対して一定の役割期待が課せられる。これが「社会関係の客体的側面」である。ここから人間が実際にニードをみたそうとすれば、この役割期待にそって社会制度に応答（役割実行）しなければならない。これが「社会関係の主体的側面」である。

ところで岡村によれば、社会制度は、本来、相互に無関係に存在しており、かつそれは人間のニードに対し一律的・画一的に対応するので（「客体的側面」）、諸制度を利用してニードをみたさなければならない現代人の生活は、ニードをみたす過程で必然的に役割葛藤をもたされ、かつモノ化・部品化される。ゆえに現代社会（高度分業社会）では、すべての人間がこのような「特自な生活困難・問題」に直面する。

こうしてここに社会福祉が登場する。すなわち、岡村によれば、社会福祉は、「社会関係の主体的側面」を重視・注目する立場から、社会制度がとりあげることをないこの「独自の生活困難・問題」を対象とし、その解決を援助する活動である、と。

- 20) 岡村、「社会福祉原論」，「調整」は89ページ，「統合」は97ページ。
- 21) 同上書，133ページ。
- 22) 同上。
- 23) 同上書，134ページ。
- 24) 拙稿「社会福祉とは何か」（注18文献②）でこの事情を詳しく検討しているので参照されたい。
- 25) 仲村優一，前掲書（注1 文献），「第4章 社会福祉の分野」参照。
- 26) 同上。
- 27) 同上書，「第1章 現代社会における社会福祉の意義」—「第4節 社会福祉の補充性」参照。具体的には以下のように説明している。

「たとえば、ある人の要援護状態が、所得保障（年金等）、医療、教育、住宅、雇用、司法等の一般施策の本来の筋道で、わざわざ社会福祉の助けを借りないでも解決できるということであれば、それにこしたことはないし、それが可能ならば社会福祉は必要ないということにもなりかねない。

しかし、現実には、そのような完全な一般施策の体系などというものはありえない……」。

それゆえに、「社会福祉の仕事は、ある人が貧困、心身障害等に起因する社会的ハンディキャップ、生活上の障害を負って家族ともども苦しんでいるような場合に、社会福祉の実践の担い手である従事者（実践主体）が、社会の共同責任を分担し、社会の意思を代表する立場で、クライアントの個別の必要に応じ、対人的・対面的関係を通して、一般対策の手の及ばないところに援助の手をのべるという性格をもっている」（傍点、引用者）。「このような性格」を「補充性」という、と。

- 28) 拙稿「老人福祉とは何か」拙監修，土居忠行他編『老人福祉論——基礎・展開・援助技術——』相川書房，1990年，において、この逆転の発想から、仲村の社会福祉の内的側面を深めてみた。

29) 拙監，同上書，8ページ。

30) 同上。

31) 一般施策の以下の規定はわれわれのオリジナルに属すると思う。同上書，8ページ。

32) 同上書，9ページ。

33) 同上。